

漱石先生の追懐、和辻哲郎

「夏目先生の追憶」という題の『新小説』1917年1月臨時号に掲載されたものがこの本にのっていました。

「夏目先生の人及び芸術」に関する特集。

夏目先生の大きい死にあってから今日は八日目である。

私の心は先生の追懐に充ちている。

しかし、私の乱れた頭はただ一つの糸をも確かに手繰り出すことができない。

わたしは夜ふくるまでここに茫然と火鉢の火を見まもっていた。

という文ではじまります。

著者の和辻氏が夏目先生を高等学校の廊下で毎日のように見た頃の感情やはじめて千駄木の先生の家を訪れ話しをした印象など、

著者が自己の確かでない感傷的な青年であった「私」の頃にもどった追憶で綴られていく。

そして、

自分が先生に抱いていた感情は、先生の方から生徒を見ればどうなるか。

ということに触れ、先生の手紙の一節が引かれている。

著者の和辻氏が夏目漱石の個性を本当に細かく受け取っていて

感傷的な青年の頃から接していたから受け取れるものであるのでしょう。

和辻氏の文を通してここまで夏目漱石を知ることができることに幸福であると思いました。

利己主義 → 不正と虚偽性に対するエゴイズム、それへの嫌悪感

情熱と不快(猫、坊ちゃん

草枕、野分)

↓

→ 徳義的脊骨

→

正義への愛 公正への諧謔

↓ 厭世的気分(虞美人草)

→ 恋愛の葛藤(三四郎)

↓ 人生は片づかない

→ 悲劇開展(それから、門、彼岸過、行人、
ころ)

↓

厭世的あきらめ

→ 正義への絶望開展(道草)

↓
生きること

生と死

↓

無頓着

→

則天去私(明暗)

→

創作と諧謔性

↓

夏目先生への追憶

夏目漱石は、芸術は、人格の表現である

眼の作家であるよりも心の作家である

画家であるよりも心理家である

見る人であるよりも考える人である

小説家であるよりも哲人に近かった

先生の作物は、イデーに基づく、作られたもの

それは、人生の報告を聞くのではなく、一人の求道者の人間知と内的経路の告白を聞くのである

・利己主義と正義

猫:正義への情熱的表現と道徳的諧謔→利己主義の不正への憤怒と、徳義的脊骨をもった人間に対するあふれる同情がのぞいている。

問題はうちに深まり、やがて同情は全人間に平等にいきわたる

野分:正義の情熱の露骨な表現

虞美人草:卑屈な利己主義や、征服欲の盛んな我欲、正義の情熱→厭世的な諦め→剔抉(てっけつ)した表現

こころ:利己主義は、自己内生の問題として

利己的の悪、醜さ→道徳的正義の問題として表現

道草:自己との葛藤→愛との対決を

主人公の生い立ちによる我欲は利己主義だ

明暗:利己主義の描写が辛辣→作中の人間を平等に憐れむ→天心な心で利己主義を征服、実現していく

・恋愛と正義の葛藤

利己主義的恋愛の悲劇

人生の厭世的気分

恋愛は人生の中核だ

恋愛は正しく生きることと抵触しないか

恋愛→幸福な心の融合は可能か、人と人の中には掛ける橋はないことの真実

漱石の作物より

三四郎の恋愛への不可抗の力→

それからの享楽主義者による正義の押し倒し→

門の不義の恋の解決、男女の相愛の深まり、押し倒された正義は、痛ましい寂しさを→

彼岸過迄の愛は双方で認めながらも心もからだも近づけない宿命的な悲劇→

行人の心触れ合わせることでできない愛の悲劇、そして愛の絶望へ→

道草:砕かれた心が愛を活かせうる

明暗:私を去り、裸になれ、そこに愛が生きる

そこに愛の失速を救う道はない

・生死の問題

超脱への道

軽々しい解決や徹底、統一を説くものにたいして反感

人生の事はそう容易に片づくものではない

頭では片付くだろうが、事実としては何も片づかない

事実の矛盾の根づよさ、そしてものがきの果ての厭世的諦め

内容の空虚さ、人生の矛盾の不調を凝視し、

ゆえに生を謳歌しなかった

それは望ましいことでも望ましくないことでもない、生への本能的な執着、則らねばならない法則

生きることの苦しさとして、不快、不完全、運命として受け入れ、それが生きる証拠となる。人生の格のごときもの、死が事実としては存在する以上、それは人間の不幸ではない、死を生より尊しとしながらも、死も致し方ない存在で、死んでもいいし、死ななくてもいい、生きてもいいし、生きなくてもいい。

このような生死に対する無頓着な姿勢は、

作物のうち、門、彼岸過迄、こころで少し改善される。

硝子戸の中で消息は静かに心の底に沈んでいった。

・創作と芸術

創作の思いが、芸術的心の満足を与えた

明暗は、製作と出会って、生の煩わしさを超え、身体への疲労と化した。→草枕や道草にも描かれた

夏目漱石の追憶 寺田寅彦

寺田寅彦の文学における師である夏目漱石の追憶のために書かれた作品。寅彦の全エッセイの中でも最も有名なもので、特に漱石の作品の裏話的な話題が豊富に記載されていることから、漱石文学に関する貴重な資料として研究者からも重要視されているエッセイです。

まず熊本の高等学校時代、英語教師として赴任していた漱石との出会いから話が始まります。そこでは当時の漱石の高校での授業の様子が書かれています。

教場へはいると、まずチョッキのかくしから、鎖も何もつかないニッケル側の時計を出してそっと机の片すみへのせてから講義をはじめた。何か少し込み入った事について会心の説明をするときには、人さし指を伸ばして鼻柱の上へ少しはすかいに押しつける癖があった。学生の中に質問好きの男がいて根掘り葉掘りうるさく聞いていると、「そんなことは、君、書いた当人に聞いたってわかりやしないよ」と言って撃退するのであった。当時の先生は同窓の一部の人々にはたいそうこわい先生だったそうであるが、自分には、ちっともこわくない最も親しいなつかしい先生であったのである。科外講義としておもに文科の学生のために、朝七時から八時までオセロを講じていた・・・

ちなみに文中の「オセロ」というのはシェイクスピアの有名な作品のことです。それにしても、「そんなことは、君、書いた当人に聞いたってわかりやしないよ」という漱石の言葉は何とも愉快で、この21世紀の現在の日本においても、おそらく漱石の「ころろ」などの作品は、高校の期末試験なり大学の入学試験なり、とにかく国語の試験問題として、よく取り上げられるところですし、高校時代に例えば『ころろ』の以下の部分で作者は何を言おうとしたのか、次の中から選べ」みたいな問題、何度となく目にしたのですが、漱石に言わせれば、「そんなことは、君、書いた当人に聞いたってわかりやしないよ」ということになるのではないのでしょうか。

そのあと、上京したおりに漱石の紹介で正岡子規に面会したこと、漱石がイギリスに洋行する際に横浜へ見送りに行ったこと、漱石がイギリスから帰国して東京・千駄木へ居を定めてからは、三日にあげず遊びに行ったこと、そして「吾輩は猫である」で漱石が一足飛びに有名になってしまったこと、などが順々に語られていきます。

そして、その「猫」に出てくる水島寒月が語る有名な講釈「首つりの力学」が、寅彦が漱石に話したレヴェレンド・ハウトンという学者の論文を元に書かれたことが明かされています。「高等学校時代に数学の得意であった先生は、こういうものを読んでもちゃんと理解するだけの素養をもっていたのである。文学者には異例であろうと思う。」とも書かれています。

また、「Tは国のみやげに鯉節（かつおぶし）をたった一本持って来たと言って笑われたこともある」というエピソードも、漱石の「猫」にそのまま出てくる話です。

「虞美人草」を書いていたところに、自分の研究をしている実験室を見せろと言われるので、一日学校へ案内して地下室の実験装置を見せて詳しい説明をした。そのころはちょうど弾丸の飛行している前後の気波をシュリーレン写真にとることをやっていた。「これを小説の中へ書くがいいか」と言われるので、それは少し困りますと言ったら、それなら何か他の実験の話をしろというので、偶然そのころ読んでいたニコルスという学者の「光圧の測定」に関する実験の話をした。それをたった一ぺん聞いただけで、すっかり要領のみ込んで書いたのが「野々宮さん」の実験室の光景である。聞いただけで見たことのない実験がかなりリアルに描かれているのである。これも日本の文学者には珍しいと思う。

この「光圧の測定」は漱石の「三四郎」に出てくる有名なエピソードで、小説中、野々宮が所属する東大の理学研究室を訪問した三四郎が、そこで野々宮の研究テーマである、光の圧力の測定を目の当たりにして驚かされ、そのあと研究室を出て、池（今でいう三四郎池）の周りをブラブラしていると、そこでヒロインの美禰子に出会うことになるわけです。

臨終には間に合わず、わざわざ飛んで来てくれたK君の最後のしらせに、人力にゆられて早稲田まで行った。その途中で、車の前面の幌にはまったセルロイドの窓越しに見る街路の灯が、妙にぼやけた星形に見え、それが不思議に物狂わしくおどろ狂うように思われたのであった。

先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わったというだけではなく、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わった。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた。

しかし自分の中にいる極端なエゴイストに言わせれば、自分にとっては先生が俳句がうまかろうが、まずかろうが、英文学に通じていようがいまいが、そんな事はどうでもよかった。いわんや先生が大文豪になろうがなるまいが、そんなことは問題にも何もならなかった。むしろ先生がいつまでも名もないただの学校の先生であってくれたほうがよかったのではないかというような気がするくらいである。先生が大家にならなかつたら少なくとももっと長生きをされたであろうという気がするのである。

ここは何度読んでも胸を打たれます。「むしろ先生がいつまでも名もないただの学校の先生であってくれたほうがよかった」というあたり、寅彦の赤心が直截に滲み出た、まさに迫真の叙述というべきものではないでしょうか。